
v i v i dって何だろう？

餅っち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

v i v i d っ て 何 だ ろ う ？

【Nコード】

N 3 0 6 2 Z

【作者名】

餅っち

【あらすじ】

弾がもしもリリカルなのはの世界に転生していたらという、ある意味IFのお話です。
息抜き&電波受信MAX状態&IS本編優先のため、更新は遅めと
いうか、そんな状況です。

そして、駄文ですが、それでも構わない！と言う方はどうぞ。

第1話 原作から逃げ切ることが出来るのだ(ドヤァ)!!と考えている内は幸

輪廻転生。

いきなりなんのこっちゃ？ と言いたくなるだろう。

俺だつて見ず知らずの人間からいきなりこんな事を言われたら、
まあ、なんだな引くな。

そんな言葉、輪廻転生というものを俺は体験した。

二次創作とかSSとか言われている奴で言われている【神様転生】
つて奴だな。

まあ詳細は割愛するけれど、イロイロな特典貰った俺は転生した
んだよ。

神様(おっぱおの大きい女神様でした。あのマシユマロの感触は
今でも覚えてます……)が言っていたある世界に転生したはずなん
だが、生まれて今現在8年の月日が流れている。

因みに、この世界について大体の予想がついたのは四歳辺りの頃
だったかね、ミッドチルダ、んでもってベルカ…… という二つの
地名。

そして、俺が住んでいるのはミッドチルダとベルカの間にある都
市。

もしかして、あの、お話と書いて【全力砲撃でブツ飛ばす!!】
という恐ろしい魔王様が大活躍するリリカルで、なのはな世界じゃ
あるまいな!?

そんなことを考えながら俺、こと【ダン・ゴタンダ】はst魔法学院小等部に入学したのだった。

無論のこと、今いるこの世界が魔王様達が活躍する時代でないことを切に祈りながら……

もちのろん、俺の儂い希望は打ち砕かれたのは言うまでもない、え、どうしてかって？ 新聞に載っていたからだよ。

エース・オブ・エースこと、高町なのはを含めた原作三人娘の写真がな……

……普通に目立たないように過ごしていれば、なにも、何も問題よね！

原作に確実に巻き込まれる呪いも特典でつけた、とかあの女神は戯言を言っていたけど、俺の方から原作キャラと言う存在から、後ろに向かって全力ダッシュすれば問題ないよね！！

「……？ さつきから、変な顔をしています、どうかしたんですか？」

「ああ、いや、なんでもない、なんでもないぞアインハルト」

「そうですか」

なんて考えながら、教室で一人で百面相をしていたからだろうか、目の前にいる地球の日本で言う所の幼稚園に入る前からの付き合いの幼馴染と言うか、腐れ縁の【アインハルト・ストラトス】が疑問の色を浮かべた顔で問いかけてくる。

な〜んか、アインハルトとの付き合いが始まってから思うのは、とつくに詰んでいるという感覚なんだが、気のせいだろうか？ 原作は第二期までしか知らないから、なあ。

まあ、良いか。

なんて考えるのだった。

く vivid って何だろう？

く 第1話 原作から逃げ切ることが出来るのだ(ドヤァ)!!!と考
えている内は幸せだった

小等部に入学してから、三年と言う時間が経過しているのだが、俺の友達と言うか、付き合いのある人間はアインハルトしかないなかつたりする。

俺自身の精神年齢が前世と合わせて二十代前半と言えることなどからか、小さい子供達と会話の波長と言うか話題が合わなかったんだよなあ。

その上に転生特典で貰った能力とかの鍛錬もあつたことで、余計に俺の周囲からはアインハルト以外の人間が近付かなくなつていった。

と言うのもあるな、この時期はやっぱり自分とよく遊んだりとか、近い精神の連中とでつるむ事が多いからな。

それも影響したんだろう、何時の間にか俺はいつも登下校をアインハルトと共に過ごし、学校内でも彼女と一緒にずっと過ごしていた。

「あ、アインハルト、今日も家で晩飯を食つていくか」

「はい、蔵さんに呼ばれてますし、ご迷惑じゃなかったら、ですけど……」

「んじゃ、決まりだな」

「はい、今日もお世話になります」

「そこまで気にしなくても良いと思うんだけどな」

その上にだ、どうもアインハルトの両親と家の両親と祖父さんが知っているもの同士のように、彼女の両親は仕事の都合からか良く家を空けるために、日本の定食屋ともいうべき店をやっている家でアインハルトは晩飯を食っていくんだよな。

まあ、何故かアインハルトも店を手伝う、とか言ってる今では看板娘のような感じになっているから、店にとってはありがたいんだけどな。

ただ、あの爺の強さだけは納得がいかない…… どうしてニアSの魔導士を生身で、魔法を使うこともなく一方的に凹れるのだろうか。

相手は犯罪を犯して逃走中の魔導士だったんだが…… 見ているこっちが辛くなるほどの一方的なジェノサイド・ゲームだったのには、かなり驚かされた。

それはそれとして、俺は律儀と言うかなんと言うか、と言った具合のアインハルトには苦笑を禁じえないのだった。

こいつはかなりしっかりとした教育と言うか、そんな感じのことを受けた所為だろうか、いつも丁寧な言葉で喋るし、受けた恩は毎回キツチリと返す奴だ。

「そんな訳にはいきません、ダンのお爺様には大変お世話になりますから」

「爺さんも母さん達も気にするなって言ってるのに、頑固な奴だよお前は」

「頑固で結構ですよ…… それに受けた恩をそのままにしていたら、ダンと同じ所に、あなたの隣に立てないじゃないですか……」

コイツの頑固さは折り紙付だ、なにしろ俺の名前を呼び捨てにしてくれたのも最近だしな。

アインハルトとの馴れ初めだって？ まあ、それは後で語るとするさ、長くなるし何より、詰んでしまった気がする感じが強まるからな。

ただ、小声で言った何かがよく聞き取れなかったんだが、何を言っただらうか？ 聞いてしまったら取り返しのつかないことになりそうでもあるから、気にしないことにしよう。

そんなこんなで、俺の家に着いた後、アインハルトと俺は店にエプロンをつけて出て行くのだった。
さてと、これからは戦場だ!!

「ダン! 5番と4番のテーブルにこれ運べ!」

「了解!」

今は夜の18時である。

立派な夕食時といえる時間帯、それは我が家こと【五反田食堂】も例外ではない。

席は全て一杯に埋まり、カウンター席も同様である。

そんな中で、俺とアインハルトは料理の配膳とメニュー取りに大忙し!といった具合に働いているのだった。

「ご注文を繰り返します、業火野菜炒め定食がお一つ、カレイの煮つけ定食がお一つの以上二つでよろしかったでしょうか?」

『大丈夫よ、今日も精が出るわね、アインハルトちゃん!』

「ありがとうございます」

笑顔はぎこちないながらも注文をキッチリと取るアインハルトの姿は、五反田食堂の一種の名物と言つか、そんな感じにもなっていたりする。

何しろ恐らくだが、アインハルト目当ての客が何人かいるしな、まあ、今はもう一人、俺の隣の妹も店を手伝っているからな、妹目当ての客もいるんだろうさ。

見た目は美少女で尚且つ、クールビューティーと言える外見なんだしな、人気が出ないほうがおかしい。

幼馴染補正を抜いて、しかも小学生だから、将来は無茶苦茶なレベルの美人になるのは間違いないだろうな。

まあ、それもあるが今の俺の体勢を見物したい客も多いけどな、何しろ。

「4番テーブルかぼちゃの煮つけ定食と焼き魚とフライの盛り合わせ定食に業火野菜炒め定食お待ち!」

『いや〜やっぱダンクんのこの姿を見ないと、ここで食ってる気にならないな!』

『だよな、両手に一つずつに両肩と両肘にまで皿を乗せて運ぶ姿を見ないと』

「5番テーブルカツどん定食と天井定食にカレイの煮付け定食お待ち!」

『お、ダンくん精が出るな!』

『相変わらず変わった運び方って言うか、すげえ運び方するよな』

お客さんの一人が言っていた通り、俺の体勢はと言うと両手、両肘、両肩に一つずつのメニューを載せて運んでいるのだよ。

え、どうしてできるのかって? 慣れだよ、慣れ。

人間、死ぬ気でやりゃあ何でもできるもんさあ。

それに身体能力も常人からかけ離れていることだしな、それが原因でもあるだろう。

だけど…… アインハルトの身体能力も同じ様に感じるのは気のせいだろうか? それに将来、俺が彼女に捕まるイメージも浮かぶのは、気のせいだと思いたいなあ!!

その後は、まあいつも通りに俺とアインハルトは爺さん作の夕食を食って、俺が彼女を家まで送り。

俺は家に帰って寝ていたんだが次の日は管理局の後悔意見陳述……なんだっけ？ 公務員にしては珍しいといつかなんと云うかと考えたもんだ。

何しろ、後悔、という言葉が入っていたんだし。

配られたプリントは見ていないし、年老いた爺さん教師の言葉だけしか聞いていなかったし、ニュースも見なかったからな、なんかその後起こった事件が原因で、その日から夏休み並みの長期の休みになったというくらいしか聞いていなかったんだけど。

それから数日後、俺は寝惚け眼で自分の部屋のカーテンを開けると、そこには。

「……………なんぞ？ あのでっかい空中戦艦……………」

何か知らんが、でっかい空中戦艦が浮かんでいました！！

周囲には変な光が光ったり消えたりしていることから、管理局の艦でないことは明らか、恐らくはなんかの敵対している勢力のものなんだろうが。

このまま起きていたら、面倒なことになりそうな予感を感じたの

で、俺は！！

「寝よ」

と言ってベッドの中に入るのだったが。

「オラア！！何を寝ていやがるダン！！」

「じ、爺さん！？」

「街中に妙な機械が現れて皆が戦っているってえのに、手前はアインハルトちゃんを守りにもいかねえってのかい！？」

「いや、は？ そんな機械が街中を襲ってるのかよ？」

「四の五の言ってるねえでさっさとあの娘を迎えに行つて、一緒に避難しろ！！！」

そういつて窓から追い出される俺、っていつか目の前に変な田筒状の物体がいるんですが！！？

その変な機械、後から知ったら【ガジェット？型】と呼ばれてい

たそれが、レンズの部分から放って来たレーザーを全て俺は。

「のわああああ！！！！？」

全弾を空中で回避した。

「なんだよ、つたく！」

爺さんにわけも分らずに叩き出され、まだ眠い俺、目の前にいるのは良いストレス発散対象、そう俺の脳は認識して一瞬で俺は変な機械に肉薄し。

「詠唱はなんぞ覚えちゃいないが、雷の暴風…… モドキ！！！」

イライラと全ての怒りが乗った一撃を放ったんだが…… あ、やっべ、やりすぎた……

何しろ、俺よりも少し上を飛んでいた機械と、その群れを消滅させただけに飽き足らず、でっかい空中戦艦の推進部と思しき部分に

火柱が……

上昇するスピードがちょこつと、心持ち落ちたような気配を感じた後、冷静となった俺が取った行動は。

「うん、アインハルトと一緒に避難するか」

だった。

無論のこと、俺は自分自身の魔力を隠蔽して、アインハルトを探していたけどな。

その後の顛末を語ると、簡単だ。

家でフルフルと恐怖で震えていたアインハルトを保護して、一緒に避難所に駆け込んで保護してもらおうとした時に、襲い掛かってきた機械数体をなんでもありの卑怯な戦法で撃退、なんかアインハルトに変な目で見られつつも、避難所にたどり着いて保護してもらった。

その後は、機動六課、だったけ？ の活躍で空中戦艦は撃沈されて終了！

といった具合だったようだ。

ただし、どうも、空中戦艦に1撃を与えた魔導士のが気になる。つたらしく、暫くの間、ピンクのポニーテールの巨乳なバトルジャ

ンキーの女性や、赤い髪を持った、かなり気の強いロリッ娘、などが俺の家がある周囲をうろついていたんだが、ロリッ娘と知り合った以外は何も無いと言いたい。

まあ、鉄槌の騎士ヴィータと烈火の将シグナムなんだが…… 気づかれてないよな？ 気付かれてないよな？

なんて考えて、俺はベッドの中でブルブルと震える日々を過ごさのだった。

第1話 原作から逃げ切ることが出来るのだ(ドヤア)!!と考えている内は幸

このSSのダンは基本的にIS本編のダンと見た目は一緒です。

後は基本的なスペックも同等ですが、年齢などによる弱体化もありますが、あまり本人は気にしていなかったり……

ただ、今は魔王様の砲撃怖い、と言っのが心境を埋め尽くしております。

後は、舞台となっている第四期の原作知識が無い、というのがありませんね。

なのでアインハルトが主人公であるのに、彼女と幼馴染と言っ関係になっちゃった彼、どう転んでいくのかは、作者にも分かりません！

第2話 おねいさんに囲まれるってのは最高です！年下は變であるもの、タッチ

何か変な状態なんだろうか、数時間程度で、一気に執筆できた……

第2話 おねいさんに囲まれるってのは最高です！年下は愛できるもの、タッチ

あの変な空中戦艦浮上事件から4年の歳月が流れ、俺達はs t h
ルデ魔法学園中等部に進学していた。

え、俺とアインハルトの関係って？ いつもどおりさ、ただ……
俺が好みのタイプの女性とかをグフフとばかりに見ていたら、機
嫌が急降下&制裁を加え始めてきたのが最近の悩みだ。

確かにアインハルトは将来有望だ、間違いなく将来は巨とはいか
ずとも美といえるくらいの乳をもっているのは確実！！

だけど如何せん、俺とアイツはちうがくせい、そう、まだアイン
ハルトのスタイルは微な状況なんだよな。

だからアインハルトをそういう目じゃ見れないし、何よりも、あ
の時の空中戦艦の事件の時に涙を流して震えていた彼女の姿を見れ
ば、まあ、将来的にもあんまりエロい目じゃ見れないなあ。

ぬっ！？ あのおねいさん戦闘力Gクラスだと！？ ええい、も
う少し俺が歳を重ねていれイデデエ！！！！

「ダン、何を見ているのですか？」

「い、イエ、何も……」

一体何時、彼女は俺の視線が他の女性へと向けられて、しかも工口い物を含んだものに変わったことを知ったのだろうか。

金髪で黒い何処かの制服を着たおねいさんに声を掛けるべきかどうか迷った瞬間に、俺の脇腹に走る鋭い痛み。

見れば、アインハルトが目が全く笑っていない微笑で俺を見ていた。

……　なんか危険と言うか、そんなものをそこはかたく感じるのは、気のせいだろうか？

まあ、それはそれとして。

「と、所でだ、アインハルト」

「何でしょうか？」

「今日はどうするんだ？」

「そう、ですね……　今日は、その、遠慮させてもらえますか？」

「分った、爺さん達には伝えておきな」

「はい、お願いします、あと……　明日はお邪魔させてもらいますから、そう、伝えてもらえますか？」

最近、というか。

去年辺りからアインハルトは、家で晩飯を食う回数が減ったのだ。

理由は分らないが何かを彼女が隠している気配がある。

だけど、彼女が言わないから俺は何も聞かない事になっているが、聞いた方が良いのだろうか。

なんて考えていたら、彼女の家に着いた。

「では、ダン、また明日」

「おう、後、アインハルト」

「……？ なんででしょう」

「夜に出かけることとかあったら、気をつけるよ、最近連続傷害事件なんて、物騒なこともあるみたいだし」

「……………はい」

被害届こそ出ていないし、噂程度でしか聞いた事ないけど、最近、物騒なことが相次いでいるからな。

その上での忠告と言うか、そんな感じのことだったんだけど、一瞬彼女の顔が強張ったのはどういうことだろうか？

まあ、アインハルトが例のあれの加害者って言うわけじゃないだ

ろっし、俺の気の所為かね。

一瞬彼女の顔からは、隠し事がばれそうになった時のアインハルトの様子と同じものが表情に浮かんだんだが。

まあ、良いか。

後に、俺はこの時の判断を後悔することになる。

原作に関わることになっちまった！って意味で。

）vivividって何だろうっ？）

）第2話 おねいさんに囲まれるってのは最高です！年下は愛でるもの、タッチはノーサンキュー！）

いつもと同じ帰り道、私はたった一人の友達であり、幼馴染、そして一番大切な人のダンと一緒に帰っていた。

年月が経つほどに分ったのが、ダンがとつても【エッチ】だと言うことです。

思うように成長してくれない私の体、スタイルもまだまだで、よく彼のお店に来る様々な女性達のスタイルとは私のスタイルは比べられない。

うう…… 武装形態と読んでいる私の姿は、あんなにスタイルが良いのにどうして…… なんて考えもする。

だけど、いつの間にか彼は管理局の執務官の制服を着た、とても綺麗な金色の髪を持った非常にスタイルの良い女性を、いやらしい目つきで見ている。

「むっ」

それと同時に沸き起こる私の胸の内の感情。
私はその感情に心当たりはついている。

嫉妬、それだ。

私が隣にいるのに、どうして彼はすぐに他の女性に目移りするの
だろうか。

私だけを見て欲しいのに。

この気持ちに気がついたのは、4年前の事件の時に、彼に助けて
もらった時だった。

その前からも似た気持ちはあった、いつも一緒に過ごしていた彼、
こんな暗い性格で虹彩異色という瞳まで持った私、同じくらいの年
の子達からは格好のイジメと言うか、そんな対象になっていたとき
に彼だけが私の傍にいてくれた。

私は特殊な生まれで、先祖の記憶が時々夜に蘇ったりして、眠れ
ない時が合ったりした。

その時に彼は決まって私に連絡をしてきてくれて、泣いている私
を安心させてくれた。

心の奥底に抱いていた感情が、ただの幼馴染から大切な男の子に
変わるのに時間は掛からなかった。

でも、あの事件の時に私は無力さも味わってしまっ。

彼が助けに来てくれなかったら、私は、あの日、命はなかっただろっから。

外の様子がおかしくて疑問に思っただけに外に出た私は、燃えている町や破壊されている建物を見て、恐怖という感情に支配されてしまったのだ。

そして、私は変な機械に【ガジェット】と呼ばれている機械によって、命を奪われそうになった瞬間。

『俺の大事な幼馴染に手を出すんじゃないっ！！』

そういつて私を颯爽と助けてくれた彼、その時に、私は彼の事が本当に好きになってしまったんだろう。

それから数体の機械に襲われたのに、彼が全部蹴散らして（アインハルトの乙女補正が入っておりますので、ダンが横島並みの卑怯な手段を講じてガジェットを撃墜した瞬間の映像は削除されたりします）くれて、避難所まで無事にたどり着けたのだから。

それから私は、それまであまり真剣に修め様としなかった霸王の武術を修める事を決意した。

彼の家で、夕食をあまり一緒に食べれなくなったりしたけれど、でも、彼の隣にいたいという思いで私は今も耐える。

私は彼を守れて、彼も私を守ってくれて言う対等な立場に、私は居たいのだから。

ただ、貴方は…… 夜にストリートファイトを行って、人に迷惑を掛ける私を、どう思いますか？
そう思ってしまった。

そんなもって夜になり。
俺はいつものように店に出るのだった。

「こんばんは、ダンくん」

「お、ギンガさんじゃん、らっしやい！」

とっくに晩飯時は終わって、客が引いた時間帯を見計らったようにやってきたのは「ギンガ・ナカジマ」さんというとっても綺麗で、素晴らしいスタイルを持つおねいさんである！！
相変わらず素晴らしい乳でっす！！ぐへへへえ！！

と言いたくなる気持ちと緩みそうになる表情を俺は、気合で抑えながら彼女の元に注文をとりに行く。

いつもは妹さんのスバルさんを含めた他の妹さんたち、親父さんであるゲンヤさん達一緒に居るんだけど、たまにギンガさんが一人でここに来るんだよね。

ただ、彼女達が来るときは、偶然か決まってアインハルトがいない日なのが気になる……まるで、何かの修正を受けている感じのような……

き、気のせいだよな？ 彼女達も原作キャラだ！とかなんて……

「注文はなんつすか？」

「それじゃあ、いつもの業火野菜炒め、ナカジマ盛りでお願いできるかしら？」

「了解つす、ナカジマ盛りつすね」

ギンガさんの注文を確認後、俺は爺さんに注文を伝えるんだけど、ここでナカジマ盛りについて説明しておこうと思う。

ギンガさんを含めたナカジマのお嬢さんたちは健啖家という言葉が、裸足で逃げ出すくらいに食うんだよ。

最初に見たときは流石に引いた。

何しろ業火野菜炒めを10人前を普通に平らげた上に、スイーツを食べに行こうとか普通に会話していたんだから。

その時のゲンヤさんの表情は形容しがたい、複雑なものだったんだけど、そりゃそうだろう。

自分の娘が、外食して普通にとんでもない量食べているんだしな。

それから、ナカジマの皆さんが家を良く利用してくれるご贔屓さんになってくれたので、爺さんがナカジマ盛りなるものを作ったのだ。

量が単純に10人前の業火野菜炒めにカレイの煮付け、かぼちゃの煮つけの各種定食なんだが、爺さんもどこで10人前の量を盛り付けることが出来る皿を見つけてきたんだか……

そんなこんなで、表のメニューには載っていない裏の注文でもあるナカジマ盛り、なんて物ができたのだ。

お客さんがギンガさん以外は居ない状況で、彼女がちょいちょいと手招きしているので近寄ると、彼女の横の椅子をポンポンと叩いたので隣に座る。

「うーん、やっぱり大きくなったね」

「そうっすかね？」

「うん、つい2、3年くらいまでは膝の上に乗せれるくらいだったのに、今は私に背が追い付きそうじゃない」

「今でも大歓迎です」

「クスクスッ、コラ、この甘えん坊さん」

うん、まあ、なんだ？ 照れる。

彼女の顔は弟の成長を喜ぶ姉、と言った様子で、俺の頭をかいくりかいくりと撫でてくるんだから。

爺さんやお袋に親父達は微笑ましい物を見る感じで、見守るばかりで何もしてくれない。

照れを誤魔化す代わりに俺は、言っているんだけど、彼女は俺の額にこつんと拳を当てて、くすくす笑っているのだった。

「ダン、出来たぞ、ギンガの嬢ちゃんの所に持って行ってやれ！」

「あいよ〜！」

ニヤニヤとした笑みを浮かべる爺さんが、常識ではまず考えられない量が盛られた野菜炒めを完成させる。

それから俺は、まだ頭を撫でてくるギンガさんから逃れてから、危なげなく皿を持つが、ずっしりとした重さに見ただけで腹が満たされるこの感覚、何時になっても慣れない。

だけど、ゲンヤさんはいつもこれを味わっているんだよなあ。なんて考えるけど、なれたんだろうなあ、とも同時に考える。

「業火野菜炒め、ナカジマ盛りお待ちっす!!」

「ありがとう」

それから俺はギンガさんにそれを届け、カウンター内に戻る。

「オイ、ダン」

「なに？」

「お前もギンガの嬢ちゃんと一緒に食っちゃいな、ついでに用意しといた」

「お、ありがとう」

戻ってきた俺をいきなり爺さんが声を掛けてくるので、俺は疑問顔で爺さんを見上げる。

爺さんが、俺に定食に使う盆を渡してきたから、受け取ると視線を感じる。

俺はそっちの方をチラリ、と見れば。

笑顔のギンガさんが手招きしているのだった。

そして、爺さんを見れば、ニヤニヤとしているので、恐らくは【可愛がられながら食って来い】とでも言いたいのだろう。

え、俺の選択って？ 決まってるじゃないか！！

「ギンガさん俺も晩飯なんですけど、一緒に食って良いですか!？」

美人のおねいさんに可愛がってもらえるならば、どんな食事でもパラダイスだ！！

こういう時はまだ押さないことに感謝できる!!おねいさんにセクハラまがいのことをしても、笑って許してくれるんだしグフツツ!

それから俺は、ギンガさんと一緒に楽しい食事をした後、鍛錬と
いうか能力を使いこなす為の訓練を行う。

その後で、風呂に入って部屋に戻ったときに、俺は自分が持つて
いる携帯端末にアインハルトからの着信があったことに気が付く。

だけど、俺が何回か掛け直しても繋がらないこと、それに俺は焦
れ始めたのだが。

まさか、アインハルトが夜にあんなことをしているなんて、この
時の俺は知る由もなかった。

アインハルトがやっていたことは？ 間違いなく俺と爺さん
が説教をする内容だったのは、間違いいな。
うん。

心配かけさせやがってあのバカ……！

第2話 おねいさんに囲まれるってのは最高です！年下は愛でるもの、タッチ

次回辺りで、vivid本編に入りますが、ヴィヴィオの出演はもうちょい先ですね。

ただ、ダンはとっくに逃げられない、とすることに気が付いていない。

と言うことには、今回の話で、一目瞭然ですね。

何しろギンガに弟分として、愛でられている時点でダメだし、ナカジマー家と知り合いな時点でもダメと言うことに、彼は永遠に気が付かないでしょう。

第3話 アインハルトよい、なんちゅう阿呆なことを……

強くなりたくて挑む

物語が動き出す数週間ほど前のステヒルデ魔法学院にて、一つの邂逅があった。

初等部の少女達三人が本を持って歩いているのだが、その歩みは危なっかしいと言えるものだった。

時折ではあるが本の重みに耐えかねているのか、ふらつきながらバランスを必死で取っていた。

仲も良いのか、少女達は談笑しながら歩いていくのだが、階段を上り始めて半分ほど行った時にそれは起こった。

「っ！あー!!」

「きっ!?!」

「ヴィヴィオ!!コロナ!!」

上っていた少女達のうち、二人、ヴィヴィオとコロナ、と呼ばれた少女達が階段を同時に踏み外して落下していくのだ。

少女達が踏み外したことに顔を真っ青にさせて、絶望、という感情に彩られた声を上げる額の上にリボンをしている少女。

まだ2人はこれから自分の身に起こることを自覚していないのか、呆然とした表情になっている。

自分の友人に起こる悲劇を見たくない、といった様子でリボンをつけた少女は目をきつく閉じ、落ちていく少女達も自分たちの身に起こることの覚悟を決めた瞬間。

「まったく、あつぶねえな」

「へ、へう？」

「え、えあう？」

なんとという気の抜けたような声が聞こえたと同時に、少女達は疑問と言う感情が先に浮かび上がる。

階段の上に居る少女は、自分の友人に破滅を齎す音が聞こえないこと、落ちていく少女達は自分の体が、暖かくて頼もしささえ感じる何かによって受け止められていることだった。

ぶつちやけ、少女達を受け止めたのは、ダンである。

それが数週間前、ダンが中等部に上がる前に起こった出来事である。

偶然図書館（の新任の司書のおねいさん目当てと言う用事）に用

事があつた彼が、受け止めたのだが。

これが後にどう影響を及ぼすのか、能力を自分で大幅に制限し、
答えを与える力も無いこの時の彼には、分からぬことでもあつた。

「vivividって何だろう？」

「第3話 アインハルトよい、なんちゅう阿呆なことを…… 強く
なりたくて挑むんなら家の爺がちょうど良かったのにねえ……」

今は夜中の2時近く、俺は未だに連絡が取れないインハルトへと携帯端末を操作していた。

店を閉めた後くらいから、爺さんや親父達が夜の町へと出発、アインハルトの捜索を行ってくれている。

既に家には向かったらしく、彼女が家にいないことは確認済みでもあった。

「くそっ…… やっぱ、あの時に問い詰めておくべきだったってことかよ……」

夜に女の子から連絡があつて、その後に連絡がつかないこと、俺の頭に最悪に近い考えが浮かぶ。

それと同時に浮かんでいるのは、昼間の彼女の様子、強ばった顔に体、隠している何か、俺に迷惑が掛かりそうだとか、勝手に考えて隠していることがバレそうになつた時に決まって浮かべる彼女の顔。

さっき爺さんと親父に連絡したら、まだ見つかっていないとか言っていたが、爺さんの方ではなんか、何人かのチンピラと思われる男共の悲鳴が上がっていたんだが、まさか爺さんに喧嘩を売ったバカがいたのか……？

きちんと極楽にいけると、良いよなあ……（注：死んでません。

それから再び彼女の端末に掛けた瞬間、ついにそれが開かれる。

「アインハルト！！？」

『じ、ゴメンねダンくん』

「って、は？ す、スバル、さん？」

俺は珍しいというか、この世界に来てから始めて間抜け面をさらしていただろう。

何しろ、俺がアインハルトに掛けた携帯端末に出てきたのは、ギンガさんの妹の一人であるスバルさんだったんだし。

正直に言って驚愕というかと言っつか、なんとと言っつかである。

幼馴染の見慣れた顔が出てくるかと思ったら、常連さんの顔だったんだし。

『うーん、この際だからダンくんにも説明しておくね』

「う、ういっす……」

それから聞かされた言葉の数々を聞いて、俺は脱力と同時に怒りが浮かび上がってくる。

あんの阿呆！小さい頃からどっかがズレた奴だとは思っていたが、まさかあんなこと、ストリートファイトをして強さを試してたなんてよ。

しかも連絡がつかなかった今日は管理局員に喧嘩を売って、しかも、やられて夜中の道端で気絶していたなんてな。

ったく！

その後は爺さんや親父達にも同じ様に連絡、事情を伝えた2人も怒ったような様子を見せた後、明日にまずは俺が迎えに行くことで決着が付いた。

覚悟してるよ、アインハルト……！！

心配、心配掛けさせやがって！

それから俺は、スバルさんが指定してきた時間、午前8時にナカジマ家の居間でアインハルトが下りてくるのを待っていた。

ゴゴゴゴ……！

と怒りを漲らせている俺、無論のこと、我が家では爺さんに親父にお袋たちも同じ様な様子で待ち構えているのは言うまでもない。

『あ、あの、やっぱり、先に入ってくれませんか？』

『ダメだ、あんなにお前さんの端末に連絡を掛けた上に、あん時の、ダンのあの顔のことも見てるんだ、お前がまずは顔を見せて安心させてやれ』

『まずは、謝って、それから怒られ様ね、ダンくんだって、貴女にイジワルしたくて怒る訳じゃないんだから』

『それに大事な幼馴染なんでしょ？ まずは貴女が彼に説明しないといけないでしょうが』

『うう………』

なんてやり取りが聞こえてくる。

一人は聞き覚えの無い声だったけど、後の二人は聞き覚えがあるというか常連さんだし覚えがある、スバルさんとノーヴェさんだ。

恐らくは聞き覚えの無い声は、彼女達が言っていたティアさんって人だろう。

それから、戸惑いなのか、ゆっくりと扉が開いていく。
そこに立っていたのは、私服のワンピース（以前出掛けた時に俺
が選んだ）を着ている彼女の姿、彼女の姿は俺に全てが知られたと
言うことによるものか、小刻みに震えていた。

「アインハルト」

「……はい……」

「正座」

「は、はい……」

ソファに胡坐をかいて座っていた俺の言葉に、素直にアインハ
ルトは従って正座（因みに俺と爺さんが畳の上での座り方として教え
た）をする。

「だ、ダン……」

「なんだ？」

「じ、ゴメンなさい……」

土下座、とも言うべき様子で謝ってくる彼女の姿を見れば、怒る
気が失せてくるのはなぜだろう。

「ただ、心を鬼にして！！」

「ああ、だけどまずはだ、どうして、あんなことをしていたんだ？」

「……………」

「答えられない、か？」

俺の問い掛けに返って来た彼女の返答は沈黙だった。

ただし、黙っていることに彼女自身が苦しさを我慢しているよう
な表情をしているからか、俺に関わることもあるのだろうかね？

この阿呆…………… などと考えながら更に彼女に問いかければ、彼女
は小さくだけど確かに、躊躇いという感情を浮かべながら頷いてい
た。

「答えられないなら構わない、俺もお前が言いたくないことを無理
に突っ込まないしな」

「……………」

「だけど……」

「…… だけど？」

「この……！バカチンがあ……！」

「いたっ……！」

俺はアインハルトの頭に拳骨をかましていた。

ゴッソ……！と派手な音を立てて彼女の頭に炸裂、彼女も苦痛で表情が歪むのだが、俺は気にせず更に言葉を続ける。

「つたく、ストリートファイトで多数の人間に喧嘩を売ってしかも昨日はやられた上に夜の路上で気絶してただあ……！」

「うっ……！！」

「お前なあ……！見た目は今でも凄げえ良いんだし美人になるのが分る人間なんだよ！もしも変な奴に絡まれたらどうするつもりだったんだ……！」

「うっへっ？」

「言いたいことはまだあるけどな、俺の家で爺さんやお袋たちが待っているからな、俺からはこれまでだけ…… 一つだけ言いたい

し、言っておく」

プクツ、と彼女の頭に漫画調のたんこぶが浮かび上がり、俺はアインハルトの両肩を掴んで、揺さぶって言っていた。

感情に任せて言っていた言葉の中に、何かまずい言葉があった気がするんだが、気のせいとしておこう。

最後に俺がわざと切った所の言葉に、疑問の色を浮かべる彼女。

俺が一番言いたかった言葉を、彼女にぶつけるのだった。

「心配、掛けさせるんじゃないよ！」

「だ、ダン……？」

「大事な、大事な幼馴染なんだよ！お前は！！」

「
つ！！？」

あれ、何か言葉の選択を間違えたのだろうか？

アインハルトがズギュウウウン！！とか効果音が付きそうな位に、顔を真っ赤にしているのが気に掛かる。

それに扉の向こう側のスバルさんたちの気配が、ニヤニヤと言う

か、変なものに変わったから。

俺の言葉の選択が間違った可能性が高いなああああ！！！！

なんて考えながら、俺はアインハルトに付き添って警防署に行く
と、そこでお袋と合流。

それから全ての手続きが終了した後で、アインハルトはお袋から
【お尻ペンペン！！】のお仕置きをされた後、爺に親父とお袋の3
人からも説教を受けたのだった。

何度か助けを求めような視線がアインハルトから向けられてき
たが、俺はそれを全て無視して、スバルさんたちに迷惑料としての
俺特製業火野菜炒めなどを大量に振舞うのだった。

はあ、なんか、嫌な予感がこれからするよなあ。

なんて考えつつでもあったけどな。

第3話 アインハルトよい、なんちゅう阿呆なことを…… 強くなりたくて挑む

後々で後輩の女の子達とのフラグが生きてくると言う、畏がww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3062z/>

v i v i d って何だろう？

2011年12月11日23時47分発行